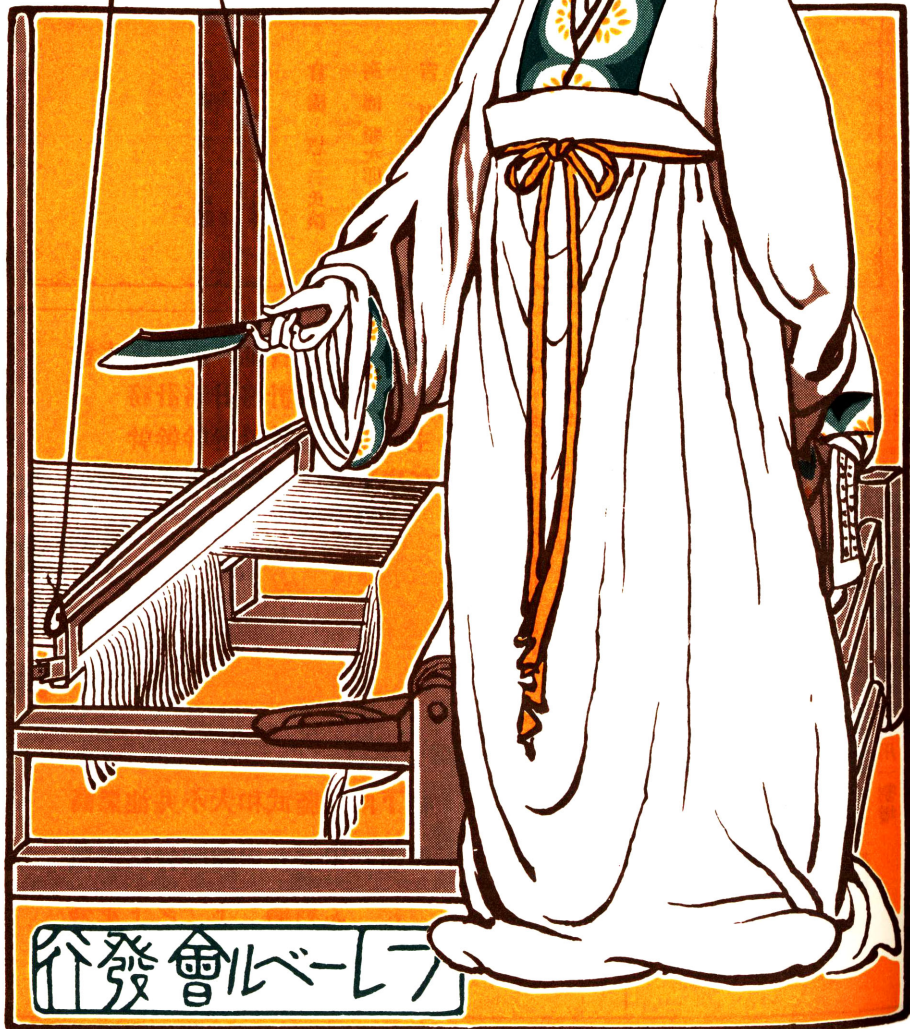
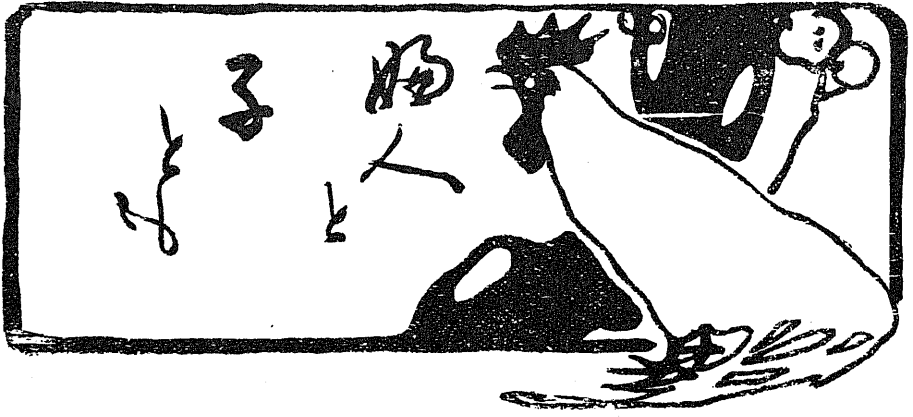


母と子





第拾卷第三號

素性法師

○ 春立はるたてば花はなとや見みらん白雪しらゆきのかゝれる枝えだに鶯うぐいすの鳴なく

源 當 純

○ 谷風たにかぜにとくる氷こほりのひま毎ごとに打出うちいづる浪なみや春はるの初花はつはな

○ 大江千里

○ 鶯うぐいすの谷たにより出いづる聲こゑなくば春はるくる事ことを誰たれか知しらまし

源 宗 干 朝 臣

○ ときはなる松まつの緑みどりも春はるくれば今いま一ひとしほの色いろまさりけり

伊 勢

○ 春霞はるがすみ立たつを見捨みすて、行ゆく雁かりは花はななき里さとに住すむならへる

○ 紀のありとも

○ 櫻色さくらいろに衣ころもは深ふかく染そめてきん花はなの散ちりなん後のちの形見かたみに

を與へるのと少しの違ひもない、唯代價を以てするのと、實物を以てするのと、これだけの相違で實質に於いては、決して異なる所はない、これ等は單に生活上から來る一つの差異である

▲知人の經驗 元來小兒は日々二三度、食欲を來たすのは、普通の事であつて、小兒の通有性である、之れには上下貴賤の差別は勿論無い、若し此の要求に應じなかつた場合には前にも言つた通り心が曲つて人の物に手でも出すと言ふやうな卑しい根性となつたり、延ひては悪い行爲をする様な結果を生じはしまいかと思はれる、自分の知人で勿論菓子や貯へて置く程の餘裕もなかつたが、極めて嚴格な人間で或時某學校の教師から、小兒に金錢を與へるのは、宜しく無いと言ふ事を聽いて一文も金を遣らない事に爲て了つた、所が其小兒は妙な根性に爲つて了つて、悪い事をも仕兼ね無い有様となつた、それが爲めに同氏も非常に後悔して今尚ほ其矯正に努めて居る、要するに下流の家庭にあつては、小兒に金を持たす、と言ふ事は生活上の必要ばかりでなく、小兒の道德上にも

大なる關係が有るものである。

▲人生と金錢 以上話した所は、單に家庭の階級上から、菓子などを買ふ爲めに金錢を持たしてどうかと言ふ、單純な事を言つたのであるが、更に廣く教育上から、一般の兒童に、金錢を所持さしてどうか、と言ふ事を話度いと思ふ、昔はいざ知らず、今日の世の中は、人生と金錢此の二つは密接の關係を持つて居る、金錢を離れて、人生無しと言つても差支ない、それを中には小兒などに金錢を持たせる必要が無い、取扱はせる必要が無いと言つてる者もある、併し小兒の時に、金錢取扱上相當の訓練、練習を爲して置かなければ、一朝自ら金錢を自由にする時が到達しても、其締括りが付かない事になる、其結果として、遂ひには一家の維持も出來なくなつたり、又は會社、銀行、或は商店の雇人となつても融通の生かぬ人間、詰り役に立たぬ人間が、出來上りはしまいか、自分此點からして、適當な時期が來たならば、金錢を持たせる必要が有るやうに思ふ、併し茲に斷つて置き度いのは、持たせると言ふのは、妄りに

與へて、妄りに費はせると言ふのでは無く、金錢其物の取扱方を、知らしめる、と言ふ意味に外ならないのである、

▲十二三から小遣錢 其適當の時期と言ふのは、幾つ位かと言ふと、大凡七八歳頃からである、此の年頃になれば、一錢銅貨であるか、二錢銅貨であるか、の見分けも付くやうになるし、少し位の算用も出来て来るから、錢を持たして、使などに遣るのも至極宜しい、それから九歳以上にもなれば、學校でも金錢の計算を盛に、教へられるから小兒も自然、金の計算に興味を持つて来て、金錢を取扱ふのを悦ぶやうになる、併し始から難しい取扱などを爲せるのは無理であるから、徐々に進ませなければならぬ、最初は釣錢の要らぬ買物から、始めて、漸次釣錢の有るやうなものに移らして、其釣は幾ら來筈と、容易に計算の出来るやうなものに進ませる、それから十二三、尋常小學校五六年位になれば、小使錢を遣つて、自由に使はせても、これは勿論條件付で、十分監督をして、正しい取扱方に慣れしめるのである、併し前に

も言つた通り、家庭の事情に依つては、今少し早くから持たせるのも宜いと思ふ、
▲教育と練習 尋常小學を終へて、それ以上の教育を受けたい者は、直に世に出で、働かなければならぬのに、世間に出で最も直接に、最も頻繁に關係の有る金錢の取扱方が出来ないやうでは、國民教育の上から言つても不都合な事である、又小學校の教授の上から見ても、どんな學科の教授でも實地と結付けて、教授し練習さして、社會に出でから直様役に立つやうに、準備してやるのが、教育者の任務である、それを算術などは盛んに金錢の計算を教へて置きながら、實地の練習と結付けないで、實地金錢の取扱をさせないのは、教授の任務を缺いて居りはしまいか、併し中流以上の子弟で中等以上の教育を受ける小兒は、前の小兒と比較して、金錢の取扱を教へるのは少し遅れても宜いと思ふ、以上の話は畢竟、終始金錢に近づかして置いて、そして卑しい心を起さず、鷹揚な小兒に育て度いと思ふ、自分の考へである、併し金錢を扱はして、必ずしも害が無いとは言へぬ

場合がある、それは小児の性質如何に依るもので、悪性の小児などは最も注意すべきで、家庭の注意と監督が最も大切である

幼稚園に就きて

佐々木吉三郎

第一 幼稚園の任務

世には幼稚園設立につきて、疑を抱けるものがある。其幼稚園は必要であるか又不必要であるかと言ふことを考へるのに家庭さへ理想的に完全にあれば幼稚園は不必要であると言ふが私は之に對して必要であると思はれます、而して其幼稚園は如何なる場合に於て必要であるかと云ふことを考へて見ると先づ其理由は悉くの家庭の子女を入れる爲めに必要であるか又或家庭に限りて必要であるかと言へば私は其或家庭に對して必要だと思ふ、幼稚園は義務教育的になすの必要はない、家庭が

理想通りであつたならば志望者も少いが理想通りにならないから之れを補ふ爲めに必要である。家庭に在りては財制上或は職務上又は地位上よりして終日子女の教養に盡粹することが出來ぬことがある。然らば其幼稚園の任務とする所のものは如何と言へばそれは次の如くである、今少しくお話をしてみませう、幼稚園と云ふことは、フレイベル氏の始めたもので氏が之を考へ出したるときはあゝこれほど良いものはないと言つて嬉ばれたとの事である。字の示せるが如くに物を教へ込む所ではなくて、幼児が自然に有せる性質の表はれ來る其を利用して順當に延ばしてやるだけのもの、これを教ふるではない。フレイベル氏は、自分は子供に教へるのではなくて兒より習つて之を他兒に告げてゐるだけのことであると言つてゐる。斯くの如く幼児の天賦の性能と其方向とを曲げることなくして直ぐに延ばす之れが即ち幼稚園の任

務であつて其任務の中で主なるものを二三あげてみると第一は身體即ち幼児の身體を良く發達せしむることである。

幼稚園に於ては幼児の成績物の善良なるものを出すには及ばぬ幼児が立派なるものを造りて之をほこりとするには及ばぬそれよりも、第一に身體を十分に發達せしめて之を以て理想とすべきである。若し幼稚園兒童と家庭の兒童とを其身體に於て比較して幼稚園の方が劣る様のことがあるればそれは大に其幼稚園の耻とする所である。されば幼稚園はよろしく身體の發達を以て第一にすべきである而して第二は幼児の衝動性につきて之をうまく満足させてやらねばならぬことである。子供は何か爲さずには居られぬもので之が即ち子供の天興の資本であるフレーベル氏は此點につきて大に考られたので之が氏の特徴である氏より以前に於て有名なる教育家はありしも此點には氣付かなかつた斯のフニース氏の如き幼児には畫を見せよ直觀によらしめよとは言ひしも此の點には未だ氣付かなかつた。

幼稚園はかくの如く幼児の有せる衝動を見て之をうまく指導してゆかねばならぬ、そして之を満足せしむるには遊嬉手工をなさしむるので之は即ち保育の案である。

斯くの如く幼稚園は幼児の衝動に基きて子供の氣の向きたる様にすべきで之れが即ち小學校と異なる點である。

而して第三は智識であるが幼稚園に於ては之れは極軽く見てよい、之を重く視て多くのことを教へんとするは良くない、

而して其幼児の智識を啓發せしむるには、なるべく人間界自然界のことを直觀せしめて以て之を啓發せしむべきである。而して其直觀せしむるものは手近のもので自分で爲したいと思ふて爲すそれ位のものでよい。斯く衝動は内部よりして外部に向つて動けども之れが漸次進めば自ら外部よりして内部に取り入れんとするに至るのである。其直觀せしむるにつきて注意すべきことは、子供には物を直觀せしむるが善いとて何ら子供に關係のなきことを以てする必要はない。なるべく子供に關

係の有ることではなければならぬ、自然物を直観せしむるにても之を兒の心に密接せしむる様にして而して後に直観せしむべきである。例へば狐を教ふるにしても、單に口が如何足が如何と言ふてするよりは狐は吾々の如く常に何か考へてゐるものを何か爲さんとしてゐるものである故に身體は斯く便利に出來てゐるのであるといふが如くにして凡て活動的にすべきで子供は又凡て物を活動的に見るものである。

西洋等に於ては凡てのものを之に運動を附して教へて居る、栗を教ふるにしても栗は何故に刺を有せるか之れは柿の實の未熟なるときと同理である栗は自分の親族を多くせんが爲めに斯くの如く實を結ぶので若し之を未熟なる中に取られては困るからそれで近づけば、また取つてはならん取れば刺でさすぞと言ふ印にかくの如きものを有して居る即ち之れが栗の一つの人格となつてゐる。斯くの如くに凡て僞人的にして小供の境遇と密接せしめて教ふれば子供は興を持ちて觀察をなすものである。斯くの如くにして自然物をあたたかき情を

以て觀察する、くせを付けるのが良い即ち智識は抽象的に授けずして具體的に直観せしめて得せしむべきである然れども其智識は幼稚園に於ては極軽く見て、只付けたりとして良い、文字を教へ計算を教ふる等の如きことは好ましきとに非ざれば小學校に於けるが如くするには及ばず保育者は智識の注入をせざる様注意すべきである、然れども愛情は十分に之を養ふ可きである。英國の幼稚園に於ては其課目の中に第一に理科を置けるは之れ幼兒をして、自然物と親ましむる爲であるそれで植木鉢等の設けが多い、そして、幼兒に水を注がしめぬ鳥に餌をやらせなどして居る、一般に英國は自然物に對する愛情を喚起せしめんとするに盡力してゐるのである。

之れは幼稚園のみならず凡て自然を取扱ふ方法を他の教科書等にも入れてある。日本の小供はこの自然物と親しむといふことがうすい大人に於ても然りである。むしろ自然物を敵視せる様な風がある。獨乙等に於て市中に數多の馬を見るに、つなげる馬を見ぬ然れども馬と馬との喧嘩もなければ

ば又人も非常に之に親んでゐる、動物園等に行くにも、よく動物にお土産物を持つて行くなど凡て動物を愛護してゐる、巴里の雀爺さんの如きは、野生の鳥に餌を與ふことを以て樂としてゐるの、で爺さんが野に行けば何處よりか野生の鳥は集り來りて其身體に止まりて樂しげにしてゐる又公園等に至りてベンチによれば小鳥は餌をほしげに人のそばに來る、斯くの如くに日本に於てもありた

きものである。されば幼稚園時代よりしてこの習慣を養ひたきものである。

日本は天然の恩恵に浴すること多きが爲めに自然物に對する愛情が乏しいのであらうか、西洋の小供は錢を貰へば直ちに運動を買求める。第四は社交上の道徳心養成であつて之れは幼稚園では教へ込むのではなくて衝動を整理して以て道徳の基礎となるものを養ふべきである。

第二、幼稚園と小學校との連絡

此問題につきては西洋に於ても四十年來の問題となつてゐるのであるが幼稚園の方からは、小學校

は幼稚園に於て爲したる糸口をこはしてしまふ、小學校は幼稚園を基礎として其上に置けばよいと言ひ、又幼稚園は小學校の豫備をしてくれ、ばよといふ、斯くの如くして幼稚園と小學校との連絡は誠にむづかしいもので容易に決行することが出來ない。

子供は順當に發達するには如何なる時期を經過するかと言ふことにつきて研究したる人があるが、即ち幼稚園教育は如何なる時期に於て受くべきであるか、又小學校は如何なる時期に於て受くべきかと言ふことを考ふべきである、獨乙の或學者

は之につきて言へることがある、小兒は第一、母の膝下に在りて發育する時期(満一歲)第二適當の室を與へらるれば之れによりて發達する時期と(満三歲位迄)此時代は幼兒委託所に入る時期である、第三は幼稚園に入るべき時期とあり而して後小學校と幼稚園との中間に位する時期ありて之れ等の時期を經過して初めて小學校に入る時期が來るのである、西洋では大抵一家に小兒室があるが日本では之れがない。而して其幼稚園と小學校と

の中間に位するものは之れはフリーベル氏の考へしもので氏は幼稚園と小學校との間には一個の溝があるからそれを取除かん爲めにとて之を設けたのである、然し之れは私は不必要と思ひます、ともかくも、以上の如く種々の時期あるによりて家庭のみに於てなすもよけれど又幼稚園に出す必要もある。

然るに其幼稚園と小學校との相争ふ原因は幼稚園は其主點とする所のものは幼稚なる小兒其ものにありて小學校では、材料を教ふる之が主點である故に其關係よりして相争ふに至るのである。

私の考へでは、此問題については斯の中間學校の如きものは之を廢して幼稚園を學校系統の中に入れて幼稚園を出發點として以て諸種の課程を定めたならば幼稚園と小學校との關係がうまくゆくだろうと思ひます、故に小學校に附屬幼稚園を設立したきものである斯くするときは色々の利益がある先づ第一は世の一般の教師が幼兒に對する手心を知らぬ然るに幼稚園を附屬として設立すれば之れを知ることが出来る又一つは家に於て幼兒を

幼稚園に入れたいと思ふときに小學校に附屬のものがあれば思ふまゝに入園せしむることが出来るから非常に便利である、それで私は將來之を説立する様に希望する。

幼稚園の種類

幼稚園を幼兒の性質上より區分すると二つある第一は貧民に對する幼稚園で第二は貧民ならざるものに對する幼稚園である、獨乙に於ては、ポルクスキンダーガルテン、とて庶民幼稚園といふものがあつて之を設立する様獎勵して居る之れ即ち貧民に對するの幼稚園である。

又多少良き家庭に對しては、ミリンダー、ガルテン、とて幼稚園的のものがある、我國に於てもこ庶民幼稚園を多くしたき考であります、されば之を設立する考を以て各小學校に附屬の幼稚園を設立すればよい。

又設立者の種類によりて區分すれば第一家族幼稚園之れは獨乙に多く設けられるれども良きものに非ず、第二は若き婦人等の設立せるもので之れは設備が不完全である。

第三は會立の幼稚園で之は貧民に對しても良い、伯林等に於て、フレーベル會の設營せる會立幼稚園は六つあつて内三個は貧民に對するものとなつて居る、第四は工場こうじやうの所有者しやうしやの設立せるもので其工場に通へる人の小供を入れるので一園に千人を入れるだけの廣大なるものが獨乙等には有る、第五は市立の幼稚園で獨乙等に於て之の種のもものが多

第六は國立の幼稚園で之は、オーストリー、スイツ等に在るのであるが、吾人の希望するのは第五の市立又は町村立の幼稚園である、私立のものは理想とするに足りない。

各國幼稚園の状況

獨乙の幼稚園事業中に於て吾人の學ぶべき點は、第一貧民に對する幼稚園、第二は保母の養成である。之れ等は必要なることで日本に於てもなしたることである。保母養成には獨乙は二課あつて一つは一年の課程で高等女學校卒業生を入學せしめ今一つは高等女學校卒業以上の高き程度のもを一年半位學ばしめて以て高き資格を作らしむ

のであるが之れは理想的の程度ではない。

第三は男女教師及母に對しての幼稚園講習會のあることである。これは五十年前より行はれつゝあるのである。成績も良きとのことである。

英國の幼稚園に於ては第一幼兒を自然物と親しましめ以て其愛情を養成する之れが十分に出來てゐる

第二は貧民に對する幼稚園事業であつてこの慈善事業は大に盛になりて却て中流社會の人の生活に苦むが如き有様であるといふ。

第三は保母養成法で之れは高等女學校卒業者に對し滿十七歳以上のものを入學せしめるので尋常科と高等科との別がある

佛國に於ては紀元千八百八十年以後幼稚園は學校系統の一と見るに至つた。母親學校といふものありて三歳より六歳迄の幼兒を入れて居る而して、フレーベル氏の考と同じく小學校との間に媒介の學校があり若し幼稚園もなにもなければ滿五歳より入らしめてよしとしてある。中間學校在るときは滿八歳にてうけとる、巴里は二十區に分れ其一區に十八位の幼稚園があつて殆ど小學校と同數位

である。
巴里に於て千九百年に幼稚園事業のために出資したる金額は二百九十萬フランである。而して幼稚園は百九十九人位で随分盛である。

幼稚園改良法

現今の幼稚園は大に進歩したけれども尚西洋に於ても亦日本に於ても幼稚園に於てする仕事は不自然ではないかと言ふうたがひがある。
然ではいかと言ふうたがひがある。
大衆の幼児を取扱ふ上よりしては自ら種々の方法が行はれる、それを世人が見て不自然ではないかと言ふてゐるが、然し自然論者は何時も一種の弊

がある。
幼稚園は出来る限り自然的でなければならぬ、然し之をするには其設備がよくなければならぬ、其設備が悪ければ自然的には出来ない、之れは設計者の大に注意すべきことである、かの廣き庭を有するときは此處に於て小兒は自由に遊ぶことが出来るが其設備がなければ小兒は自由には出来ない。之れは設備の罪である。
極寒雨天の外はなるべく外に在りて遊ばしめ、そ

れには、腰掛等の如き之を小形にして置けば之を外に持ち出すことが出来るから又便利である。

而して幼稚園保母は案をむつかしく立つるには及ばぬ只臨機應變の所置をよくせねばならぬ、幼稚園の調子は愉快にある様にすべきである。而して

幼稚園に於て教へ過ぎる様のことかありはせぬか、中には考へる足らぬものは算を教へ文字を教

ふるものが無いでもないが幼稚園では複雑なるものを教へるには及ばぬ複雑なるものを教ふるには

又時期がある。幼稚園に於て複雑なる遊嬉等を教へて喜べるは之れは幼稚園として價値あるもので

はない。
幼稚園に於てはなるべく神經を使はぬ様外にありて自由にすべきである日本人は一般に神經過敏殊

に東京人は又一層で尙東京に於て上流の家庭に於ては又過敏である。

斯く神經過敏にこそしくしたるものでなくて、ユツタリとした人となさねばならぬ。

小學校に於て幼稚園より來りし子供は社交上の智識ありて教師に親むも一學期よりは二學期三學期

となるにつれて美なりしものが良となり可となる
之は即ち幼稚園の關係の有ることで幼稚園時代に
物をチヨク〜と教へ過ぎるからではないかと思
はれる。

幼稚園を経たる小兒は身體の發育の著しきを以て
ほこりとすべきである。かの早熟せしむるといふ
ことにつきては大に注意すべきであつて神經を刺
戟せずして身體を發育せしむべきである、手指、
聽覺の練習なりとて種々のことをなすは其程度を
考ふべきである、子供には小さきことをなさしむ
るよりは大きなことを爲さしむべきで室内で豆細
工をなさしむるよりは庭に出て蟬をとらする方が
い。

日本人は大に身體の發育を必要とするので幼稚園
に於ても之を第一とすべきである。

幼稚園は最初よりして梅花の美しきものを咲かし
めず野生的に發育せしめ、最後に於て立派なる花
を咲かしむべきである。

鷹揚なる人物をつくるべきである。
而して將來に於て貧民に對する幼稚園が出来たら

ば午食牛乳等を與へる様にしてほしいものであ
る。

幼稚園事業をして發達せしむるには國家が注意し
て保母の養成といふことに注意するの必要がある
又小兒の性質を學問的に研究する又社會にありて
も幼兒教育事業を大に獎勵すべきである。(終り)

子供の臆病

倉橋惣三氏談

▲子供は皆臆病 坊やは何故斯う弱虫だらうとお
父様が嘆息すると、さう言ふ人も子供の時は、
矢張り臆病だつたと、祖母様が笑ふ、私が今此様
な事をお話するのを、母親が聴いたら、定めし笑
ふだらう、實際私も子供の時は非常に臆病で夜
などは到底、獨りで外へ出られなかつた、併しこ
れは諸君も同様、共通の性である、決して可笑し
いものぢや無い、
▲子供の怖がる物 其處で先づ、子供の怖がる物

の種類を分けると、第一感覺から起るもので、大きな聞き馴れぬ聲、強い光などである、どつちかと言へば、子供の時は眼に見る物より、音の方が早く感じるから、どうしても見る物より音の方を恐れる傾きがある、次が場所、高い所、廣い所、闇、閉塞、ひとりぼつち迷子、などである、其中で閉塞と言ふのは、眼を塞がれるとが、鼻を押へられるとか言ふ種類で、子供にとってはこれが非常に怖い、それから自然界で云へば、火、風、海雲、電、雷、人ならば他の伯父さん、泥棒、巡査先生、加藤清正などは時に依つて恐れるもの、一つである、知らない伯父さんなどと言ふのは、殊に恐れるやうに思はれる、それから變怪では幽霊化物、天狗、鬼、うぶめ、此うぶめと言うのは、昔言傳へられたもので、夕方軒下に小供が立つて居ると、連れて行つて了ふ、と言ふ幽霊の一つ、それから雑の部で言へば、夢、病氣、貧死、罰、目、齒、瀧車、鐵砲、力などで一體目と言ふものは、非常に愛を顯はすもので、殊に婦人などの眼は、さうである、併し中には寒いやうな眼、と言

ふやうなものも有る……さう言のを怖がる、或は睨むと言やうな事、一ツ目小僧、三ツ目小僧なども眼の付様で非常に怖い、それから齒で元來齒は怖い物で、喰着とか噛ちるとか言ふ事が有るのにも拘はず何故接吻を愛情の濃な事と爲て有るだらう？畢竟それは、お互に喰付くとか、噛るとか言ふ怖い物を安心して許して居るからだ、と或る學者は言つて居た、

▲子供に怖い條件 不意、異常、茫漠、力の壓迫後くらひ事、自らの頼無き感じ、苦痛の豫期などは、子供の怖る條件であつて、其内の茫漠は、所在、形、運動と斯う三つに分ける事が出来る。その中で形——語り化物の技術などで、形の定まつて居ない物は恐れるものである、例へば大入道にしても一定して居る形だつたら、左程にも思はな

いだらうが、大きく成るかと思へば、一寸法師のやうになつたり、此の定まらないのか、非常に恐ろしい、今昔物語の内、自分の腕の有るのを誇りして、太刀を枕元に横へて威張つて居た、所が或

時女房が慌しくやつて来て、大變です。今臺所に泥棒が来て、裸へて居ますと言つて、其處で其男は太刀を提げて行つて見ると、大入道が太刀を提げて立つて居る、歸つて来て此事を女房に話すと、自分の見たのと九ツ切違つてる、又女房が行つて見ると今度は居なかつた、と書いてある、昔の謎にも鬼も見馴れたるは宜しと言ふ事がある、始終見付けて同じ形であつたら左程恐ろしくもない者である、これも昔の事だが、兩國橋に化物が出ると言ふ評判が立つた、其所で或男が何に大入道だの三ツ目小僧などは怖くないと、大變威張つて行つて見ると、大入道でも三ツ目小僧でもなく目も鼻も何も無のつべらぼうの女が出て、それで其男は恐れて逃歸つたと言ふ話がある、是等もつまり形の茫漠である、それから原因が不明で動くもの、例へば闇の中へ這入ると、色々の形の物が彼方へ行つたり、此所へ行つたりして、何となく薄氣味が悪い、これは眼球の生理的作用であるが所を形、運動などの茫漠に合する恐しさである。▲恐怖に勝つもの、子供が恐怖に打勝つものは一

沈着冷静、二勇敢なる資性、三快活なる性質、四強き意志、五明かなる智識、六保安の念、七信賴の感、八自彊の具等を備へる場合で、これはベイン氏の説であるが、或人が五十人の小供に化物が出たら、如何すると聞いた事がある、さうすると四十九人迄は皆逃げると答へたけれども五十人目の九才になる小供が夜ならば逃げるけれど、晝間ならば切つて了ふと言つた、成程晝と言ふ事は、小供にとつては大丈夫といふ、一つの保安の念で在る、自彊の具も其通り、相當の要意がしてあれば恐しくはないものである。▲臆病の由來、臆病の原因は先づ第一が經驗による恐怖、第二想像による恐怖、第三本能による恐怖、第四病的の恐怖から來るものである、第一の經驗によるものは、自らの經驗と、他から教へられたもの、と斯う二つに分ける事が出来る、是等は言ふ迄もなく、自分で怖がたつと思ふ事、他から聞は怖いと、夜は怖いと、其人の經驗を教へられたものである、所謂進化論上の祖先から、傳は

つて来たものであつて、経験から起るもの、想像から起るものとは別物である、昔藤原清河は非常に猫を怖つた、これは経験でも想像でもなく、性來怖いのである、それに就いて一つ面白い話がある、清河が或時年貢が滞つてなかく、收めなかつた事があつた、其の時に役人達が相談して、どうも仕方が無いから、猫を連れて行つて脅かして取らう、と斯う言ふ事になつて、清河の家に猫を連れて押掛けた流石の清河もそれには閉口して、とうとう年貢を收めたと言ふ事である、第四病的の恐怖、これは三歳ぐらゐから七八歳ぐらゐ迄よく有る事で夜半にヒヨツコリ飛起きて、泣出したり甚いものになると意識をさへ失ふ事がある、これは物事に激しく感動した時とか、消化器の關係、或は親達の神經質などから遺傳されるもので、夜恐怖の恐れと言つて居る

▲恐怖の結果 先づ恐怖の結果を内外に分けて言ふと、外の方では逃げて隠れる生理上の變動、身がすくむ、全身強直、死(氣絶)、病氣などである殊に生理上の變動は實に恐しいもので、分泌物に

變化を起したり、第一脈搏が非常に早くなる、心臓の鼓動が激しくなるなども、吾々の常に經驗した所である、時によれば母親が驚いた爲めに、小供が死んだと言ふ例さへある、それはどう言ふ原因かと言ふと、恐怖の結果、乳に一種の變化を起した爲めなのである。

▲ホピヤ 恐怖の結果病氣を惹起す例も又尠くない、これはホピヤと言ふ一種の疾病で、彼の有名な彼得大帝なども、橋の上を歩くと、必ず病氣になつたと言ふ話であるが、之も一種のホピヤである、内の方では、それが爲めに愈々臆病になるとか、疑心暗鬼とか、自己的 邪推、或は迷信などを呼び起す基となるものである。

▲恐怖の利 併し此恐怖と言ふ事が、又一面から言へば、非常な利益となるもので、まづ危害の豫防(實際生活上)注意の聚中、是などは何事に限らず意を用ゐて、詰まりは用意周到、智識を啓發する基ともなる、それから暴慢の抑制で、世の中に強がる者ばかり居たならば、決して社會、道徳などが、保たれるものでない事は今更言ふ迄も

無い話である、又一つは自然宗教的の觀念を生じて、崇美、敬虔などの心さへ、起させる。

▲恐怖の教育 子供には此の恐怖と言ふ事に就いて、漸々と教育する事が必要である、まづ中を三つに大別して甲を爲てならぬ事、乙をすべき事、丙を一體の方針とする爲てならぬ事は、子供を戲

れに脅す事、これなどは世間に能く有る事でお父さん達が子供の怖るのを見て態々種々な真似をして脅す、そして其驚方が面白など、悦んでる人が随分ある、これは大に注意すべき事である、

それから教育手段として脅の濫用、恐れを恐れで癒す事などは大に考へなければならぬ。

▲お伽噺、芝居 彼のお伽噺、子守唄、芝居なども大に注意を要する、今見た所、面白と言ふ事のみと主眼として、唯恐しい怖いと言ふのを、土

臺として書いた本などが随分と多い、これ等は徒に小供の恐怖心を強らしめるばかりで、何の役に

も立たない、元來日本の化物は、怖いと言ふばかりで極めて無意味である、先づこれからして第一

に改良しなければ行けぬ、其處へ行くと西洋の化

物などは進んだもので、花の中でダンスを行るとか、歌を唱ふとか少しの恐しい味も無い、化物と言へば些細の問題のやうであるけれども延いて言へば國家的の問題である。

▲教育上の問題 終りの丙一體の方針はスタンレー

ホール氏の説であつて、教育上の問題として恐怖は、棄つべきものに非ず、導くべきもの也、本

能的恐怖より道徳的の畏怖へ、威嚇的恐怖より崇美的畏敬へ」と斯う言つて、以上の如くに恐怖

は一面恐しい結果を生ずると共に、又一面には利益となる事もあるのである、であるから強ち恐怖

を制さうとするよりも、寧ろ漸次に好い方面へ導くと云ふ事が第一の要件である。

宗教は家庭の中心

高楠順次郎氏談

物質文明の勢力が日に増し盛んになつて社會の組

織が益々煩雜になる時代に完全な生涯を送らうとするには第一に我々の生活と思想とを單純にする。と云ふ事を心得て居なければならぬ、生活と云ふものは餘儀ない場合には極く單純にすることが出來やすいけれども富の程度が許すに隨つて實は許さぬ程度までも煩雜になる傾きがあるから富の程度が許す時でも常に複雑な生活は成る可く避けて最も單純な最も趣味ある生活を選び物質的生活を單純にする計りでなく精神的生活を單純にして日常の思想を簡易にして腦力を休養して行く事に注意しなければならぬ此注意が足らないと年齢も若く身體も働き盛りにあるべき時に神經衰弱に係る人が多い偉大な精神は複雑な思想や疲勞した腦漿から湧き出るものでない、それと同じく偉大な人物も亦決して煩雜な贅澤な生活から生み出される者ではない、昔から、低き家が高き精神を養ふ」と云ふ言葉も其意味に外ならぬのである。借て何故に思想や生活を簡單にしなければならぬか。と云ふと、我々の生存は本來甚だ複雑であつて其複雑な世に處するには自己の身心の休養を目的と

し子弟の訓育を本旨とし出來得る限り生活を單純にして弊害の生ずべき餘地のないやうにするのが肝要である而して我々の生存が如何に複雑であるかと云ふに我々は物質的生存を主とする上に精神的生存も完全にしなければならず其又其精神的生存も自ら二方面に分れて居て一面には倫理的生存があり、他の一面には宗教的生存があるのである。拙著「國民と宗教」に述べて置いた通り、人を本位として人と人との融和を計るのが倫理である絶對を本位として絶對と人との合一を期するものは宗教である、絶對とは宇宙に一つあつて二つとな最高真理を指すのであつて或は至上神とも無上佛とも云ひ得るもので一言に云へば即ち「神」である此神と人との合一を期するのが宗教であつて神人の合一と云ふ事は何も現世の人が天上に赴いて神に合するの事ではない我々の實際が「人」であり我々の理想が「神」であるから我々は何時かこの理想を實現して人が神の地位に迄進み實際とも出來得ると云ふことを人に教ふるのが宗教で

ある人間は井上圓了博士の云はれた通り理性があると同時に信性がある信性の満足は宗教でなければ出来ず信念のない人は根の無い浮草と同じやうで護謨人形のやうに綺麗に動いて居ても魂はないのである、物質の風潮に感化れた人達は得て宗教を無用視するが信性の満足を主とする宗教を捨て置いて商業道德などを説くのは根本を捨て枝葉を養はんとするもので遂には道德を一つの手段に遣はんとする靈僞に陥るのである虚榮の生活で靈僞の道德で物質一方の拜金宗が盛んになつたら日本の風潮は遠からず西洋と同じようになるであらう物質的生存では西洋と負けずに競争しなければならぬが同時に精神的生存では我國の特色を充分發揮しなければならぬそれを忘れて物質文明に目眩み宗教までも無視するのは大なる間違である凡べて社會一般の道德は倫理的生存の配下に屬して居て倫理は社會に於て養はるゝ人の感情で宗教は宇宙に於て養はるゝ人の感情で前者は社會(人)を對手として居るが後者は宇宙(神)を對手として居る之を清水文學士は社會的感情(倫理)宇宙的

感情(宗教)と稱して居て宗教の方は根柢が深く範圍が廣く理想が高い無論之は一般の倫理學者が皆然う云つて居る話ではないが併しどうしても倫理ばかりで社會を支配することは出来ないと同時に宗教ばかりでも世界を完全にすることも出来な歴史あつて此方倫理と宗教とは相助けに行はれて來た倫理は宗教に依つて一層その光を放つのでありが唯その本務とする所が少し相違して居る今倫理的生存と云ふ事を圖にして見ると凡そ左の通りである

倫理的生存

(家族生活(父子關係)
社會生活(同胞關係)
國家生活(君臣關係))

義務忠心

倫理的生存には以上の如く凡そ三方面があつて廣い意味で云へば皆社會的生活に入るべきものであるが家族的、國家的を別にして教へるのは日本に於て殊に必要があり、且つ昔からの歴史的教育法である我國の教育の淵源は實にこの兩方面から出るのであるから倫理の根本も亦この二つに在るそこで殊に之を三方面に分つたのであるこの三方面に向つて各々その本務を盡すのが倫理的生存を

まふする事である、宗教的生存とは何んなものと云ふとも同じくこの各種の方面をまふするに在るは勿論で倫理と各方面に働くものである

宗教的生存
親恩(孝順本位) 人恩(信義本位)
君恩(忠厚本位) 佛恩(信心本位)
信念中心

宗教的生存も倫理と同じく三方面を教へる上に絶對に信心生活を説くのがその特質であつて之を謝恩の念から説いて信心生活の上に各方面の義務をまふせしめんとするのであるそこで其勢力も強く且つ利己本位の生活に陥ることが少ないのは宗教の長處である、無論佛恩でも神恩でも天恩でも何でもよい自ら認めて絶對と見る至上眞際のものを目指すのである宗教と云ふのは、人心の各方面を満足せしむるが最上の宗教で人には知、情、意の三方面であるからこの三方面を遺憾なく満足せしめて、その精神生活を完全ならしむるが第一の宗教である、宗教の撰び方には最も注意を要するものである。

以上は廣く倫理的生存と宗教的生存との異なる所以

を述べたのであるがこの二生存は表裏相應じて人間の生活を完成するものであるから、殊に家庭には宗教が最も必要である、父子兄弟同住して居る家族生活には逸居して教なく禽獸の如き有様は最も避くべきである假令家族を教訓するとしても毎日に學校のやうに教訓する譯にも行かず、功能も少いが一家族の規律を保つ爲に共同に行ひ得る神聖の儀式があると言ふことが必要で先祖の祭祀をしてても父母の遠忌を行つても唯僧侶神官を頼むばかりでは家庭の訓育とも何ともならないから家内の者親族のものが共に式典を行ひ共に訓育の教義を聴き及ぶべくんば信念の同一を計ることは家族生活の規定として頗る肝要な事である。

英國の家庭で最も美とする所は朝食前に家族一同が列席して下婢迄も之に加はりバイブルの一二章を讀み主人が祈禱をすると、一同相和して黙禱しそれから朝食に就きその日の仕事にかゝるのである。

之と同じ様に我國の眞宗信徒の家では主人が音頭で簡単な讀經をしてその後蓮如上人の教書若くは

御一代聞書などを一二章宛讀み心を和けて朝食し
 各自の仕事に就き夕刻は又一同佛前に同一の式を
 行つて眠りに就くのである、唯以上の儀式は讀經
 の修法にのみ終つて家庭教育の全體に影響を及ぼ
 すことが尠くないから可成之を訓育の中心とする
 やうに注意しなければならぬ宗教と云へばやゝも
 すると迷信に流れ易いものであるからこの點は充
 分注意しなければならぬ一、祈禱卜占は一切之を
 禁すべきこと、二、一神一佛以外の禮拜は之を禁
 すべきこと、三、信心生活に導き宗教的信仰が倫
 理的象現の實果と相伴ふやう注意すべきこと、此
 三點の備はりたる宗教なら如何なる宗教でも宜し
 い兎に角宗教がないと家庭の規定が中心を失つて
 その訓育を全ふすることが出来ない人と人との關
 係には倫理の方が多く物を言ふやうに見へても人
 間以上の勢力を認める點になると倫理の黙止する
 所に宗教は發言權を持つのであるそこでこの點に
 一定の信念が定まつて居ないと生に迷ひ死に惑ひ人
 間以上の聲には耳を掩ふて止むやうになる之れで
 到底人の情意は満足することが出來ずその信性を

二〇
 満足することが出來ず宇宙に棲息して自然に生ず
 る理想も満足することが出來ないそこで個性の修
 養を計るためにも、子弟の教育の爲めにも、家庭
 の規律を保つ爲めにも個人信念の樹立を期する爲
 めにも宗教は家庭生活に於て最有力な中心點と
 ならねばならぬ。

室内の裝飾

吉田博氏談

▲室内裝飾 と之ふ事に就きましては自分でも大
 分久しい以前から考究致して居りましたが凡そ日
 本の家屋に對して室内裝飾を施すには三様の場合
 があらうと思ひます、即ち第一は從來の日本建築
 木造建築に裝飾を施す場合第二は建築構造を
 全く改め西洋風に裝飾する場合第三は西洋風の建
 築靴穿きの室を成るべく日本趣味と調和させ
 て裝飾する場合であります、從來の日本建築に於
 ける室内裝飾を見ますのに往々何等裝飾的の意義

無しに只徒らに古人の舊型を墨守して居るに過ぎないと思はれる節が多くあります、裝飾的知識の無い人が昔の型を模倣するばかりで建築上又裝飾上何等の新発見もなければ新趣好も無い、何の家を見ましても其の裝飾法は殆んど一定して居りまして個人の家としての特色變化は少しもありません、此の變化の無いと云ふ一原因は私の思ふには日本建築が木材を多く用ふると云ふ事と壁や襖の如きものが裝飾するには餘りに弱く且つ粗末に出来過ぎて居るからだらうと思ひます、新趣好を施すには従つて新しい骨組が必要でありますから將來の日本建築は此の要求に應じて相當の改良を施さなければなりません。

▲全然西洋風に倣つて裝飾を施すのも東西兩洋の趣味の粹を取つて之を調和させて裝飾しますのも等しく裝飾家の仕事には相違ありませんが前者に比らばれば後者の方が遙かに困難な仕事であります西洋の材料を其の儘に用ひて西洋風に裝飾する事は格別の苦心を要しませんが西洋趣味を取り入れて而も之を全く日本趣味化して靴穿きの室を

作ると云ふ事は少なからず頭を要するのであります而して又最も非難を受け相でもあり突飛な物が出来さうでもありませんのが此の所謂靴穿きの室であり、目慣れぬ内こそ可笑しく感ぜられませうが何時か東西兩洋趣味が全く融合されて了へば一向可笑しいとも變だとも感ぜられなくなりませう、要するに現今は日本の建築裝飾の變化すべき時代で美術家裝飾家は此の際一般人の趣味の養成に勤め廣く世界的趣味を入れて新しい日本の美的趣味を作る事が必要であらうと思ひます、次に前の三様の場合に於ける室内裝飾に就いて稍や詳しく述べませう。

▲日本室の裝飾 従來の日本座敷に施された裝飾を見ますのに如何にも單調で且つ變化に乏しく殆んど裝飾の意義に適つて居らぬものさへ往々あります然しなから日本座敷でも裝飾の施しやうに依つては随分變化のある面白い趣好の室が出来たのです壁や襖や敷物や天井や其他机掛座布團等の氣持の宜い室とする事も出来ませうれば又陰氣な

落付いた氣持の室とする事も勝手に出来るのであり、書齋客間居間玄關等が夫々室内裝飾を異にするべきは勿論の事であり、室内裝飾を完全させる爲めには、單に前に云つた壁襖敷物等の色の配合に注意するばかりではなく、額掛物、置物、茶器菓子皿の類に至る迄總べて其の座敷に宜く調和するかどうかと云ふ事迄吟味しなければなりません、從來の人は色彩の配合など、云ふ事に就いては何等の注意もせず、譬へ机掛の色と花瓶の色と調和を損はうが火鉢の色と座布團の色とが調和を損はうが、一向顧着しなかつた様であり、又形や線の妙味と云ふ事に就ても同じく不注意で線と云へば單に直線の用法しか知らず、曲線美や均勢の美は更らに解しなかつたのであります。

▲床間の無い座敷 其れから又日本の座敷には必ず床間と稱する物が殆ど傳來的形式的に附屬して居て床の間を以て其の座敷の中心裝飾の中心として居る風があります、私に寧ろ床間なる物を全然廢して仕舞ふ方が宜いと思ひます、然し全然廢して仕舞ふとなると其れは寧ろ建築上の問題に入

るべき事ですから茲に述べる必要はありませんが、兎に角床間を從來の様な意味に於て床間として使せず裝飾の中心、座敷の中心を其の室の中央に移したいのであります、從來の日本座敷に床間が正座とされて居りますので、上客は必ず其の前に据はらせられる、從つて客は後ろを振返つて見なければ裝飾が目に入らぬと云ふ不便があるので、折角の裝飾も何の意義をも成さぬ事になつて仕舞ひます、でありますから私は從來の如く單に床間のみを以て裝飾所と爲た、坐客の座席の位置が一定した様な座敷を改めて裝飾の中心と室の中心とが一致した様な座敷を作る事を望んで居るのです。

▲建築の構造を改めたる場合に就きましては寧ろ建築家に譲る可き問題ですが、内部の裝飾に依つても客間と書齋夏向きの室と冬向きの座敷とは各特殊の感情を表はす様に作る事が出来、例へば客座敷ならば成る可く華やかな明るい調子の色を多く使つて裝飾し、快活な室を作らうし、書齋ならば成るべく沈靜な色で裝飾して、且つ餘り外界の音が聞えぬ様な落付いた室を作るが宜いと思ひます、又

夏冬向きの座敷を作りましますのも同じ理屈で裝飾の施し方によつては涼しい室とも暖かい氣持のする室ともなります。

▲室には色々あるが在來の日本室に西洋趣向を加へたもの、即ち少し進んだ裝飾だが、元來日本のこれ迄の室内裝飾といふものは何所から出た一枚板だとか南天の床柱だとか云つてつまらぬ所に力を入れて居て室内の調和とか統一とかには少も考へて居ない、此様な一枚板とか床柱とかに多額の金を費す位ならば今少し氣持の好い趣味の多い裝飾が出来る、勿論贅澤を云へば春夏秋冬悉く室を異にせねばならぬが然ういふ注文は些と無理だらう、兎に角今は安價にして趣味あるものでなければならぬ。

▲凡て室内裝飾には色の調子に注意を拂ふのが肝腎で一つの室の中で中心點となるものを定めて共に調和する様に其の周圍のものを置かなければならぬ、近頃テーブルを据ゑる事が流行するが其の机掛を中心とすれば其に従つて花瓶、茶碗、菓子器等は成るべく机掛と調和した色合のものをださ

ねばならぬ、又敷物の色に依つて火鉢とか机とかの色も注意すべきもので昔の様には何處焼だ此は何年前のものだ此は何の木だと個々のものばかりに凝つて居て更に其の色の調和とか統一とかを等閑に附する様では、決して客の氣持をよくし趣味を増すものではない。

▲此色の調和を取るには反對の色よりは相似寄つた色を用ひなければならぬ、次に壁の裝飾だが第一に壁畫が必要だ日本の室にも壁畫を畫くべき餘地は何程もあるのだが一つには等分間隔でないの壁の心が脆弱なもので今の所では什麼しても駄目だ、で先づ其の色とか線とかに注意するより外はない。

▲壁や建具の色はバサツとしたものでなく成るべく奥深い色にせねばならぬ又之等のものを組成して居る線は皆直線のみだが此も大に曲線を用ひる必要がある兎に角在來の様は少しも纏りのない難然たるものでなく今少し色の自由、線の自由等に注意して貰ひたい。

▲殊に冬向きのものとしては室内凡てを温みの

ある色即ち赤、黄、鳶色などにするのが最も必要だ、それに床も今日では不必要なものと思ふ、又活花も在來の様に單に床にのみ据ゑるならば今迄の如く平面的で好いがテーブルの上に据ゑて四方から見るとしては所謂流派ものは不適當である、之には其の花瓶を組立て、居る線に調和を取ればそれで可いので別に枝を矯め葉を栽る必要はない

▲以上の事に注意すれば略は大體の調和は取れるが借それからは愛嬌だ、それには花を用ゆるのが面白いが其の用ひ方は室全體が沈んだ調子の時には最も眼につく色の花を据ゑて中心點とし複雑な調子の室には白黄等を持つて來るのが最も愛嬌のあるものだ。

▲兎に角私、在來の建築や裝飾法を全然打破しなければ眞に進歩した理想的な室内裝飾は出來ないと云ふ意見だから今迄話した事は決して十分に思ふ事を云つた譯ではない、只在來のものより稍や進んだ所だと思つて貰ひたい。

智力の發達を圖る事

光藤夫人

極幼少な子女に向つて、智識を無理に收得させる必要はありませぬが、段々長ずるに連れて、子供が不審を起して質問を出す時には、よく確實に之を解決してやる事が大事で御座います。マー春の閑静な時などに、子供を野原につれ出しますと、ソレハンソレハ大騒ぎで、ア、アソコの花は何と言ひますか、アソコを飛んで居る鳥は何で御座いますか、……アソコはアソコ木はとすべて目新しく見えるもの、一として子供の不審の種でないものはありませぬ。子供の喜びの種でないものはありませぬ。ア、大切なるは此時ではありますまいか。

世の母と呼べる、方は、此時如何なる態度で子供に接せられますか、如何なる言葉で子供の不審を解決されますか、私は其實況を承りたいと思ふので御座います。

私の推量では多数の母様がソソナものは何か分りませんと一方面倒臭いとは云ぬばかりの答の下に、ズンズン自らの慰藉に耽られる様な事はないかしらと存じます。無論眞に不明の母なれば其答もいたし方なき事ながら、相當な教育あり智識を有して居られる立派な母様が、かゝる不親切なる答をして、子供の智力の發展するのを害しては如何にも不似合の事と存じます。

私の狭き経験によりますと、こんな不文不才な私でもマ一學校などへ出まして子供を教へる位は何んでも御座いませぬが、さて家庭に入つて實際自己の子供を愛育する中に、實に痛切に感ずるのには、自己の學力の淺薄にして、普通智識の缺乏する事でありませぬ。子供に虫の名を聞かれても、満足な答を與へる事が出来ませぬ、星の事を聞かれても、月の事を聞かれても、太陽の事を聞かれても、花の名を聞かれても、常に不満足な答をする事が多いので、衷心耻しさに堪へませぬ。世には私如き文盲ばかりではありませぬ。世に賢明な母君の下にヌラスラと身體の長すると共

に智力ののぼる人も御座いませぬが、又私如き不明の母の下に、其智力の發展を妨げて、小にしては個人の發展を妨げらるゝと同時に、少し大にしては一家の發展の邪魔をなし、更に大にしては國の發展を沮害せらるゝ方もあらうと存じます。瓜の蔓に茄子はならぬ、ア、子供の不審を解決するにさへ苦む程の母親で何で立派な子が得られませうか。賢明なるしかも子供に親切なる、行届きたる母親ありてこそ子供は何の苦もなく發育するので御座います。サーソーいたしますと、どうしても母親といふ責任を負へるものは自己過去の不遇は言ふも及ばじ今日より今より一家を經營せる遑なき身の中より時間を見出して、たとへ一日中一時間たりとも、二時間たりとも、新聞雜誌其他保育に關する事柄を研究して、我子の發展上に資さなければならぬ事と存じます。よい稻實を得んと思へば、よい種を播かなければなりませんと同じに、よい子を得て一家の繁榮を圖らんに其の種となるべき母の智徳をすゝめなければなりません。徒らに臺所にのみ引込んで、其日く

の障りなければよいと、甘んじて居るべきではあるまいと存じます。

回顧すれば、私の専ら家庭の人となりてより此處に一年有半、未だかつて子供と寢食を別にした事は御座いません。毎日毎日雨が降らうが、雪が降らうが日が照らうが此の愛兒とはなれた事は御座いません。たといやむなき用事の爲めに外出する時でも、全く子供を連れなないといふ事は御座いません。況して散歩及植物園とか名高き人の庭園とかに至る毎に、五兒は或は脊に或は手をひき、ゾロゾロと皆連れ出します。其の時子供の得意と喜びは大變で御座います。見るもの皆珍らしく極幼少なるはまわらぬ口で何か指しては私に答を求めます。大きな子は牛を見ても、犬を見ても、馬を見ても珍らしく、アレハ何、アレハ何とよく聞きたがりませす。ア一此時か最も大切な智識の根を植る付ける時機では御座いますまいか。其の時私の不明はよく子供に失望を與へる事多いのを残念に思ひます。右にのべましたのは子供に智識を與ふる事の漢と

した一纏めなお話して御座いますが今之を具體的に少し詳細に申述べませう。

生れてより學齡までの幼兒を家庭で愛育する其の傍、智力も授けるといふのが主眼で御座います。それから、そんな學校見た様な規則正しい時間とか規定は無論御座いません。幼稚園時代の子にはそれ相當マ、幼稚園の向一層幼稚な位な考へでやるので御座いますが、時間も決定してやるわけでは御座いませんがマア次の様に案を立ててやります。

- 一、唱歌
- 二、遊戯
- 三、體操
- 四、談話

一、唱歌は體育の箇所でも申述べましたが又智力の方面にも種々益する事が多いので御座います。子供が不知不識の間に色々な智識を得ますが、其の歌詞によりて、高尚な智識を得て、將來を益する事が多いので御座います。子供の時はよいもわるいも素より考なく只人真似をして言ふので御座いますが、其の中でも

歌詞も撰擇しなければなりません、どうか節のおもしろいのがありたい物と思ひます、節おもしろくやさしく歌つて居ますと、つい覺えるので御座います。

それには俗語もづいぶんありますが又極卑劣な事柄で殆んど教育上有害な言葉があります。

「いやならよしやれ。よしべの子になれ。ペン弾くなら。藝者の子になれ。」

右は無論よくない事柄で御座いますが、子供はモ一何も分らず只調子を合せて人に負けじと三歳になる子まで、まわらぬ口でしやべつて居ります。

節おもしろい唱歌を盛に現はしますれば、右の様な卑近な事柄も自然廢れ行くので御座います。うがソレが中々一度覺えたらばとまららないので御座います、兄がやれば弟もやる、姉がやれば妹もやるといふ様な調子で毎日叱られながら中にやめる事が出来ませんのには開口いたします鳩ボウく鳩ボウくとか、一寸法師とか、大江山とかの様なおもしろい唱歌がモット澤山に

出來ればよろしいにと存じます。

二、遊戯も色々やつて見ますが、ドーも四五人でやるのに適當して子供がおもしろいなと心酔してやる様な材料に乏しいので、きまつた遊戯よりか自由遊戯をやらして置く方が、全程愉快に見受けられます。

三、體操も時々やりますが、餘り澤山はやりません、此二三の項は體育の方が重いので御座いますから、別に茲にはのべません。

四、談話 之は皆様も御存じの、子供の智識開發の好材料として、世上に歡迎される、事です、唯の元帥たる巖谷氏が如何に世人の歡迎厚きかを見て子供に大切な事柄であるとうなづかれるので御座います。一小士官より身を起して帝位に登り、歐洲全土を震駭せしめたる佛帝ナポレオン、の幼兒を讀む人は、誰れもかも偉人の生涯の其種子は、か弱き母親か訓話及び談話が預りて力があつた、事を悟らるゝ事で御座いませう其の他かゝる類例は外に澤山ある事で御座いませうから、世の我が子を愛育さるゝ母達は如何

に注意をこゝに拂つて居られますか私わたくしの淺きあさき經驗によりますと大要次の様にいたして居りま

す。談話だんわの材料ざいりょうは成丈子供なるたけこどもがおもしろいと喜んでし

かも心身しんしんの害がいにならぬものでなければなりません。其そのの中で、子供こどもはなるべく恐こはくつて凄あだい

様なやうなのを好このむむ風ふうがあります。たとへば安達あだちヶ原げんの鬼きとか羅生門らせいもんの様ようなのを大層たいそう好このむみますが又義

経つね秀吉ひでよしの話はなしなどもおもしろがります。或あるは夜よ癡ちにつく時末子ときすえこに添乳そでちしながら、或あるは晝

は縫物ぬいものをしながら、話はなしきかせるので御座ございますが、談はなしにだんだん身みが入いりますと、裁縫さいほうも何

もソツチ退ひけで手てまねし口くちまねして話はなします、子供こどもはモー一いち生懸命目しやうけんめいめを見みはつて聞いて居をりま

す。しかし餘あまり幼少おとせうな三歳さんさいの子こは未だ談話はなしに面おも白味しろみを持ちもちませんが、四歳よんさいになりますのは時々

ネダリます。其その時とき

おばーさんとおぢーさんがあつて、おぢーさんおぢーさんはねお山やまに柴刈しばかりに行いきました、おばーさん

は河かに……と談はなして居をりますと

おぢーさんは山やまにはいかり(便所)に行いきましたとて子供こどもにませつかへされて大人おとなも一いっ緒しょに大笑おほはなひする事ことも御座ございます。時ときに取

つての感興かんきやうで常つねに家庭かていが晴々ははといたしま

す。餘あまりに滅入めつにる様ような談話はなしの材料ざいりょうは常つねに避まけますが

或ある日ひ試しみに孝女かうにょ白菊はくきくの話はなしをして聞きかせますと、七歳しちさいと九歳くさうさいの二兒にじはたい大層たいそうおもしろがります

て其そのの次つぎを次つぎをとせがみます餘あまりこんな材料ざいりょうの話はなしを度々たびたびする事ことは或あるは考物かうぶつであらと、存ぞんじます

が會々あひあひかゝる事ことを聞きかせても、害がいはなからうと存ぞんじます。

それからこれは餘あまりおもしろい材料ざいりょうでは御座ございませんが子供こどもに衛生思想えいせいしきやうを開發かいはつする様ような談話はなしの時

々ごとしてやります。一體たいい日本人にほんじんは一般いぱんに衛生思想えいせいしきやうが薄うすいかと思おもはれます。自分おのれの身體しんたいが垢あかの爲ために

不快ふかいを感じかんじても、其その原因げんいんを調しらべて之これを避まけ様ようとせず、或あるは常つねに胃痛いづつうを訴うへても、其その胃いの養やう

生せいをするでなく、腦のうのわるいのを知しりながら之これを治なせんと自らみづかつとむる事ことをなさず、只ただ一ひとも二

もなく醫力をかり、甚しきは神に祈ることも御座います。何等の迷信で御座いませうか、平素常に心の修養の助けとか何とかの爲めに神に祈るはよろしいが、病氣になつたからとて神に祈つたとして何で神様がおなほしなさりませう、それよりか、平素衛生に氣をつけて、出來得る限り自分で自分の身體を丈夫にする様にとめるやう、教育するのが肝要で御座います。私はよくお預りして居る中學時代の生徒にさへ自己の健康を増進する事をつとめずに唯弱い／＼とこぼして悪くなれば醫療にのみ托するの生徒を見て、切に幼時より子供に衛生思想を鼓吹する事が大事であると感するので御座います。

それで私は毎日温浴させる時は大きな兒は何でシャボンで洗へばよいのか垢すりをかけるとか聞きます時、時こそ來れと機をはづさす。

よく奇麗に皮膚を洗はないと、其面に無數の孔があつて、體内の汚ないものが分泌して居るのを止めますとか。或は肺臓がこゝでそれはこんな事をするとか、極簡單に子供の辨へ

らる、事丈話して聞かせます、かくして身體の大切なる事、如何に賢い子供でも、其健康を害しては將來お國の爲になる様な人にはなれない事など、手をかへ品をかへて、悟る様にとめます。

私はよく六歳や七歳の幼兒に入湯させて矢鱈白粉をつけてやらる、親御を見る事があります、そんな事をして虚榮の根を植る付ける、よりか衛生思想の一つも與へて心身の健全を圖る方が其の子將來の爲ではあるまいかと存じます、他事ながら談話につきてこゝに一言してをきます。

マニラの話

小寺みさを

氣候、フィリッピン群島は熱帯の内にありますから何處へ行つても只々御暑いばかりで少しも寒さを感じるといふ事は御座いませぬ、私はマニラ

市に居りましたから其他のことは餘り存じませんが兎に角年中通じて御暑いので御座います、先づ一年中の氣候を大別してドライシーズンとレインシーズンとの二季に分ちます、六月から十一月までがつまり雨の多い時季で十二月から五月までが一番御暑い時季なのです、丁度日本と反對で日本の御寒い時が彼地では最も暑く又内地の土用時分が彼地では一番涼しいので御座います、私どもがマニラに着きましたのは丁度六月の中頃で御座いしましたが其暑さには随分驚きました何しろ船がマニラ港に入るや否やまるで温室に入れられたやうで上陸の仕度をする間に汗でびつしよりになつてしまひもうく暑くてく堪へられぬ程でしたマアこんなならば一所に來るのではなかつたのになど、つまらぬ事を考へた事もありました、後に聞きましたらマニラ港には其頃風といふものが少しも吹かないのだそうです道理で暑いわけでした先づ三井物産會社の社宅に招かれましたところが氷入のラムネだのソーダだの出して下さいましたか團扇を一つも出して下さいません、私どもは

暑くてく堪へられぬ程でしたのに三井の方々は平氣な顔をして汗一つ出していらつしやいません、私は不思議ですから伺ひましたら「ナニ此位ならば涼しい内ですよ此頃は雨が降りますから」などと、おつしやつて笑つて居らつて漸く奥から扇子を持つて來て下さいました位でした。ところが不思議な事に馴れるに従つてそんなに暑いとも思はなくなり上陸當時に無中で扇子を使つた事がおかしくなりました、扇子などを使へば使ふ程暑さを屬すのですもの、それを知りませんから初めはどなたでも扇子を手持つたきり、私なども此暑いのに何故皆様は團扇をお使ひにならなにかしら、と不思議に思つて居りました。それですから少し彼地に馴れますと外を通る人を見て居りまして往來を扇子を使ひながら歩いていらつしやる方を見ますとア、あの方は此頃上陸なさつたのだなとわかるようになりました、私たちも初めは其内でしたもの、それで先づ皆様から氣候の御話を豫め教へて頂きまして其當時はや雨季に入つて居て三四月よ

り餘程凌ぎよくなつたのだと聞いて驚きました、マアこれで凌ぎ易いのだとは、それでは三四月頃はどんな暑さかしらと心配致しました、其翌年になりますと餘程こちらの身體も暑さに馴れて來ましたせい初めに心配した程でもありませんでした。

雨季と申しても日本の入梅のようにジメ／＼の毎日降りつゞくのでは御座いせん、朝から好い天氣だと思つて居りますと俄に黒雲が起つて參りました、オヤ空模様が変わつて來たと思ふと同時に、ラ／＼と大變な音をさせて非常な大粒な雨が降つて參ります、それこそ篠つく計りの大雨ともまをしませうか實に瀧のような雨が降つて參ります、其雨が太抵長くて二時間位でせうか忽ちに晴れてまだ、雨だれの音を聞いて居りますのに早やカン／＼と容赦なく照り付けます、それですから往來の人は雨が降り出しますと家の軒下に入つて雨止みをして居ります、それも其は一寸待つて居さへすれば直ぐに止みますから傘などさして歩く人などは一人も見られませんが、こんな鹽梅に日に幾

度となく降りますのです、ところが驚く事には雷鳴が非常で、私など初めは恐はくても一人では居られませんでした、大きな家がビリ／＼とゆれるようでも、それ故よく處々に落雷します一度、私どもの家の軒に電話の柱がありましたら其柱に落雷致しまして下に居りましたボーイと馭者とはそこに倒れてしまひましたが間もなく氣が付いたそうでした、私共は其時隣家に參つて居りました、餘りひとひ音が致しますから歸つて見ましたら以上の始末で驚きました。

暴風雨の時は日本より餘程早く七月の大方半頃に當ります、随分ひどく大抵の太木は倒され屋根ははがれ貧乏人の家などは實に無慘なものです、其暴れの時が少し朝夕涼しいと思はれます、それでもフランネルを着ましても朝夕だけで日中は矢張り單衣か麻の着物に更へなくては居られません、嵐といつては此様に年に一度ありますだけで其他には大雨は降つても別に恐れる事は御座いせん、八九、十、十一と丁度六月から幾月の間は此様によく雨が降りますがもう十二月に入りますとズツと暑う

なりまして五月まではめつたに降雨を見られませ
 んで只照り付けられます、お正月にはいつも打
 よつて笑ひます、皆汗を拭き、新年の賀をのべ
 かるた會などにも紹の着物などで打寄るのですか
 ら、日本ならば寒くて、大變に重着をするの
 に、こゝでは紹やかたびらでも尙暑いとばかり違
 ふものかと、其對照が餘りおかしいので笑ひます
 全くあちらで綿入れなど見るもいやな心地が致し
 ますそれも其はづ手に觸れる物一つとして冷めた
 いと感ずるものは御座いませぬ、水道の水はお湯
 も同然、家の中のテーブルでも椅子でも戸でも何
 でも手でさわつて見て冷めたいと感ずる物は水を
 のぞく他何も御座いませぬ、日中に外を見ますと
 熱の反對で顔をそむける程ですから歩いて庭にで
 も出ませうものならば靴の底を通して足が焼き付
 けられるようで御座います、馬車に乗つて居りま
 しても馬車の足を付ける處が眞鍮で張つてありま
 すのが反射してとてもマバユクで居られません、
 食事を致して居りますのに電氣扇をかけて置きま
 してもそれ程暑いと思ひませぬでも背から胸にか

けてダク、と大汗が流れまして食事後早速着更
 へるといふ始末で御座います、とても日本に居り
 ましては想像も及ばぬ位で御座います、私など
 もさぞ暑いでせうとは思ひましたが出立の前に天
 長節の夜會にもお正月の夜會にも婦人は紹を召
 すといふ事を聞きそれ、仕度は致しましたが内
 々疑つて居りました、ところがどうして、聞いて
 たより以上の御暑さでした、と申しましたらそんな
 暑い處によう生きて居られると思召すでせうがそ
 こは熱帶地の常で始終冷めたいそれは、涼しい
 よい風が常に吹いて居りまして其御蔭で別に焼死
 にも致しませんでした、ハワイもそうだと伺ひま
 したがつとにかくマニラは其涼風の爲めにそれ、
 事務を取る事も出来分に従つて働く事が出来ます
 それに極お暑いのは午前十時頃から午後は四時ま
 で、五時になりますとズツ日の影が出来ま
 して涼しくなります、そして夜は又實に好き氣候
 になりまして晝間どんなに、暑さに苦しむでも夜
 分涼しさには、終日の苦を忘れられます、それ故
 睡眠は十分に安々とれます、反へつて日本の土

用の内の方が夜分蒸し暑くて苦しむ事が度々あります。御座いませんでした、しかし最も暑氣の強いのは五月の月で、其頃は皆避暑に出かけます、それはマニテより餘程北のアンテイボルといふ山の上に皆参ります。其アンテイボルの山の有様も一寸風變りでおもしろう御座います。が餘り長くなりますから又項を改めて御話し致す事に致しませう、此様に暑いもので、すから正午から午後二時までにはひるねの時間としてありまして、どこのオフェイスでも店でも二時までにはビシ／＼と戸をしめて皆家に歸つてひるねを致します。すから、其間には決して人を訪問致しませんし、又來る人も御座いません。外に出致し度ても、外に馬車一臺でも通りません。實に静なもので御座います。

私が初めてマニテへ参りました其當時はそれこそ見る物さく物皆珍らしく、又不思議にも思はれました。たが此地に馴れるにつれて、初めにおかしく思つた事も、當前に見え、それから尙其おかしかつたのが、反つて上品に見えて参りまして、だん／＼と其内から

時徴を見出すようになり、ました。次に其二三をお話し致しませう。

あちらは熱帶國です。すから年中お暑いばかりで、私どもは一日の内に少なくとも二三度は肌着をとりかへなくては居られません。でした。それが、大した仕事を致さないでも、自然に汗ばんで、とも朝着た着物を一日中着通すといふ事は出来ませんでした。位です。すからあちらの土人はどうかと思ひました。らどんな貧乏人でも、決して汗くさい臭をさせません。で何時でも眞白な肌着を着て居ります、それが上流から極下等な仕事をする人迄でも、必ず奇麗に洗濯して、ちやんと火のしをかけた物を下に着て居ります。すには感心致しました、聞いて見ました。ら少しでもよごれた下着を付けて居るのは、非常な耻辱なのだ。さうです、それが自然洗濯が上手で御座います。いつか、私が洗濯屋が参るのが間に合ひません。から心安くして居るあちらの婦人に話しました。らそんなら、私が洗つて來て上げると申します。が私も考へました。折角親切に洗つてやるといふものを、断るのもわるいしと云つて、どんな洗ひようをされ

るか心配でしたけれども餘り云つてくれませんがから
 とにかく洗い直しにやるまでもと其つもりで頼む
 で見ましたら其翌々日もやんと立派に洗濯して持
 つて来てくれましたのには驚きました、洗濯屋の
 洗つたのと少しも違ひませんのですものほんとに
 感心致しました、あちらでは裁縫の出来ない婦人
 はあつても洗濯の出来ない婦人はないそうですそ
 してどんな物でも洗つたら必ず火のしを掛けて
 用ひて居ります小さなハンケチでも火のしを掛け
 ず持つのは何より耻として居ります、私ども日
 本人には此清潔法はつくづくいゝと思ひます、と
 ころがあちらの人はお湯に入りませぬお湯は熱の
 ある病人があびるものとして居りまして平素は水
 をあびます、其あび方が一種特別なのです婦人は
 先づ髪をときサヤといつてスカーツのようなもの
 (いづれ衣服の御話な後日致しますが)を脇の下
 から乳の上のところでしたつかりと着ましてつま
 り肩から腕だけ出して乳以下全體を包むでそして頭
 から水をあびます、先づ頭はゴッといふ木の皮を
 打碎いたものを水の中でよく揉み其出た汁で洗ひ

ます私も土人から教はつて洗つて見ましたが初
 めは中々よこれが落まぜんでしたが二三度洗ふ内
 に馴れてよく落ちるようになりました、以上のよ
 うにして髪を洗ひましたら額際へつくねて置いて
 今度は肩から水をかけます、其かけますにはタポ
 ツといひましてコ、ナツツの實の皮をくりぬいて
 丁度大きなお椀のようにしてそれでザザ〜とか
 けるのです見て居ますとまるで子供が水いたづら
 をして遊ぶて居るようなものですがそれで彼等に
 は十分なのです身體を洗ふのに決して手拭を用ひ
 ませぬ只手の平で腕やそこいらを擦つて居ります
 つまり着物を着たまゝ水をあびて居るのですなせ
 ならば彼等は乳を人に見られるのを非常に恥とし
 て居りますからなのです、
 これは西班牙政府時代からの習慣でつまり西班牙
 の習慣に馴れたものでせうがとにかく暑いところ
 ですのに胸を開いて冷を取るといふことを致しま
 せんのに感心致しました、反へて日本の裏店な
 どに参りますと随分如何はしい體裁を見る事があ
 りますがこれなどは南洋の土人より遙に劣つて居

るかと思はれます、此冷水浴はマニラ市中ではそれ／＼家の内の水道の水をあびますがマニラの市から少し離れますと川に入つてあびで居ります朝九時頃が夕方四時過ぐる頃少し田舎へ参りますと老若男女打寄つて前に申たような姿で水をあびて居ります不思議な事には極暑い日中に水をあびると病氣すると申して決して致しません、又水をあびますのに何故頭からあびるといふのに頭を洗つてそれからからだを洗はないと眼がわるくなると云ひ傳へて居ります、それ下たとひ毎日でも必らず頭を洗つてからあびて居ります、其爲でもありませんが不思議にもあちらの婦人で眼鏡を用ひて居るものは一人も見受けませんでした、最も日本のように四季の移り變りといふ事がなし年中夏の仕度で間に合ふのですから自然裁縫も日本ほど忙してありませんからでありませうが、とにかく一般に眼は丈夫のようでした、それから家を非常に奇麗に掃除するのは實に感心だと思ひます、家の建方に三種ありまして石造と木造と竹造との區別はありますが何にしる床をよ

く拭き込むのであるのには驚きました靴でうつかり歩きますに滑べてあぶない位です、例へどんなあばら屋でも床だけは實にびか／＼と光つて居ります何でそんなに拭くかといひますとバナ、の葉でよく擦るです、私も教はつて致して見ましたが多くすべ／＼して美事な色になります其拭きますのに手で致しませんで一束にしてある葉を一つづ、兩足で踏むで滑つて歩きます幾度も座敷の内を往つたり來たりして居る内に自然に奇麗になるのです此の掃除の仕方は一寸聞きますと随分亂暴なやうですが暑いところですから座つて手で拭いて居てはそれこそ暑くて仕方がありませんから自然とかういふ仕方がなつたものでせう床は毎日朝夕二回右のように拭きますが窓の敷居が又特別市廣でそれが折々テーブルを代用致しますと申しと變に御思ひでせうがつまり窓のそばに椅子を出して外をながめ庭をながめながら人と話を致します時にテーブルの代用を致します、それ故其敷居は非常に立派に拭いてあります木も随分堅いのを用ひてありますがそれを毎土曜日に灰のアクで木の

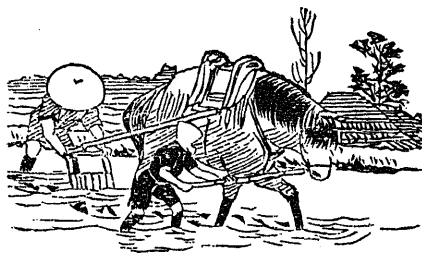
葉を以て擦りよく洗ひます其木の葉が非常にザラ
 くで丁度日本のトクサのようですからそれでア
 クを付けて洗ひますから眞白になつて實に心持ち
 よく奇麗にしてありますまだ中々お話し致します
 と長くなりますから今日はこれだけにして又後日
 に申上ませう。

兒童の經驗

中島 泰藏氏談

少年期の終に至りても兒童の經驗は意外に狭いも
 のである。此事は小學校へ初めて入學する兒童の
 精神内容を調べて見れば分る。或人が米國のボス
 トンの小學校へ今や入學せむとする者に付きて調
 べた所に依りますと、手首や蹠の名を知り居し者
 は半數に充たず、彼等が心臓、肺臓又は肋骨を有
 することを知りし者は五分の一に過ぎず左右の手
 を區別して知らざりし者は五分の一あり。七分の
 一は星を知らず、十四五分の一は月を知らなかつ
 た。約十分の九は草類の動物より取るものなるこ
 とを知らず、綿布の大本は綿なることを知らなかつ

つた。十分の八は麥粉や煉瓦が何にて作られしか
 を知らず、十分の七は此の地球の形を知らず、羊
 毛製の物の材料を知らなかつた。木製物の樹木よ
 り造られたる物なることを知らざりし者半數あ
 り。牛乳の牛の乳なることを知らざりし者五分の
 一あつた。四以上の數を知りし者は極めて少數で
 あつた加之總て是等に付き且又彼等が知る所の
 者も斷片的無系統的である。(教育學術界)





此頃の惣菜

● 焼味噌和

里芋と昆蕪を好きほどに切り、別々に熱湯にて茹で煮出汁と醤油にて薄味に下煮をし次の焼味噌にて和へる

(焼味噌は並味噌を摺り、砂糖を少しまぜそれを摺鉢の廻りに同じ厚さにのべし火にかざして少し焦げる處を煮出汁にてゆるめりなり)

● 鹽焼烏賊

烏賊の足、腹、甲など取捨て平らに切り開き水にてよく洗ひ表へ横縫に庖刀目を入れ鹽をふりかけ暫く置きて後、強火にかけて焼く

● 鯖の照焼

鯖をよき程に切り醤油に浸け強火にて身の方からよく焼く

● 馬鈴薯の砂糖煮

シヤガ薯を縦に打ち水にて幾度も能く洗ひ濃き砂糖水に鹽を入れ沸騰したる中にて汁の如くなる迄煮る。

● 乾するめと里芋の煮付

乾鰯を水にて好く洗ひ薄い灰汁に暫く煮け置き水にて好く洗ひぬる湯を澤山加へて一寸に火にかけ直ぐにおろし其儘蓋をして蒸し

柔かになつてから取出し小さく切り前の鍋を好く洗つて其中に入れ鹽節の煮出汁に砂糖を少し合せた汁をひた／＼に加へて火にかけ暫く煮て後に甘鹹い加減に醤油を注し又暫く煮て汁と共に鉢に移し置き里芋は皮を剥き好き程の大きさに切て次に鍋に澤山の水を入れ火にかけ沸騰してから鍋の中に敷篋を敷き其中に芋を入れ柔かになつてから敷篋のまゝ鍋より出し水をかけて好く洗ひ水氣を切り煮出汁と少しの砂糖にて煮、甘鹹加減に醤油を注し乾するめと共に皿に盛る

● 牡蠣豆腐の餡かけ

牡蠣の白い袋だけを取つて粗板の上に置き庖丁で細かく叩き摺鉢にて摺り裏漉をして解いた玉子と鹽節の煮出汁とを半々に合はせた汁の中に混じり醤油を程よく注しそれを薄手の井かフリキ製の流し箱に流し入れ蒸籠にて蒸し金杓子にて掬ひ椀に盛り湯羹餡をかけるし、生薑を添へて出す

● 芥和

あさり剝肉を水にて洗ひ目篋に入れ水氣を切り空取りをなしそれを醤油の中に浸け其醤油を切り驚菜は沸湯に入れて茹で水の中に暫く浸け水氣を切りあさを浸けた醤油の中に浸け好く絞つて一寸程の長さに切りアク抜き芥子を醤油で程よくゆるめ前の品々を和へる

● 鹽鮭酢の物

鹽鮭は焼いて其肉を細かにほぐし篋に入れ湯を注け直ぐに其湯を絞り和布は微温湯にてざつと洗ひ熱湯に入つてざつと茹で水氣を切り酢に浸け其酢を絞り又其酢の中にほぐした鮭を浸け其酢を切つて和布と共に皿に盛り三杯酢をかけるし生薑を添へて出す

● 白味噌汁

白味噌を摺りて漉すこと例の如くにし豆腐を極く細かき賽の目に

切り水の中に入れ椎茸は水中に浸け柔かにし熱湯に入れて茹で石突を去つて薄く刻み菜を熱湯に入れて茹で細かに刻み一緒に汁の中に入れてざつと煮る

●半ペンの付焼

半ペンを水にて洗ひ水氣を切り烈火に金網を渡して兩面を焼き醬油をつけて炙り乾かす

●椀盛料理黒鯛と茗荷苗

黒鯛は三枚に卸し、小形の切身になし、鹽を振り二三十分経てのち鹽を洗ひ、沸湯中でザツと茹で揚げ、直ぐに椀に盛る、茗荷苗の上の方は硬く用ひ難ければ、下の方丈三寸許を探り、小口から細く刻みよく洗ひ、二番煮出汁に少量の醬油を加へて沸かしたる中に一寸浸ける、煮るは宜しからず之を揚げて絞つて盛り合す

●飯、蓴菜

飯は三枚に卸し、小さく切り、鹽を振り、二三十分置き鹽を洗ひ落し沸湯にて茹で、椀に盛り、蓴菜は根を切り、鹽水で洗ひ醬油を加へたる二番煮出汁に浸け置くなり、後に椀に盛りて汁を注ぐ。

●満月蓴薯

蓴薯に用ゐる魚類は鯛、鯛、鱈、鱈などを選び、先づ魚を三枚に卸し皮を剥ぎ、肉のみを細かに切り、庖丁で叩き、次ぎに摺鉢に入れ之に一番煮出汁と煮減味淋とを少しづつ、代る代る注で摺り佛掌薯を魚肉量の十分の一程卸し込む、煮出汁の量は肉量の十分の一にて味淋は七分の二位が適當、扱て絶てを摺り混ぜたる後裏漉にかけて煎茶に椀又は小形の椀の内面を水で濡し、右裏漉肉を杓子にて其の底に能く敷き小皿を用ひてもよし、圓形中凸のものになし、多量に沸かし居る湯の中に放し能く茹でるなり、満月し

んじよは長く茹でざれば心に火透らず、大抵卅分乃至四十分は茹でざるべからず、茹でたらば取り揚げて椀に盛り汁を注ぐ、卸生姜を用ふ、陳生姜の皮を剥ぎ、卸金にて卸し手にて軽く液を絞りに取りて用ふるなり。

●鮑、蓴薯

椎茸、卸し柚子、鮑を貝附のまゝ束箸にて能く擦滑り、味を去つて水で充分に洗ひ、卸金の柄の尖つた方の貝と肉との間に刺し込んで身を貝から離し腸を切り去つて肉を金にて卸し、肉を細かく切り庖丁の脊にて叩いて之を摺鉢に入れ、少量の醬油を加へてザツと摺り、之に卸鮑を摺り込み、(其割合は魚肉が鮑の五位に、木版の上)少量の煮減味淋を加へ、一定割合は魚肉が鮑の五位にてよく洗ひ、少量の醬油を加へ、蒸籠にて蒸すなり、後庖丁にて薄く切つて長時間用ふ、通常は四十分にて蒸して石突を去り、縦に板

●鯛の皮附蓴薯、禮拔蕎麥

鯛の鱗をよく拭き、三枚に卸し、皮を剥く時皮裏に薄く肉を附けて置く、肉の方は細く切り庖丁で叩き摺鉢に入れ煮減味淋と煮出汁を加へ、裏漉にかけて置く、竹の皮を濡らして下に入れ置き、魚の皮を肉附面が上になる様擦りたる上へ裏漉肉を一寸位の厚さにして用ひ、蒸籠にて蒸すなり、蒸し上りたらば四五分位の厚さに、之は澤山の水にて茹で上げて茹で上げ少量の醬油を加へたる二番煮出汁にて下煮をなして盛り合す

●皮卷鮓

渡稜草、椎茸、獨活、鮓を何かを用ひ、皮の残りし時にする料理に分けて廢物利用の意に協し、海苔油を加へたる二番煮出汁にて洗ひ、ツと茹で水にて洗ひ、皮を絞つて用ふ、椎茸は巻の様に巻きて、長きまき生椎茸を一寸位の厚さに切つて用ふ、鮓の皮を絞つて用ふ、何れにしても下煮をなして用ひ、石突を切り沸湯にて茹でるなり、何れにしても下煮をなして用ひ、獨活は短冊にして用ふ。



智恵の 種子

▲婦人の毛髪(其二) 婦人の毛髪は男子と異り殊に日本婦人の如きは従来の習慣上止むなきにせよ毛髪を頗る苛酷に取扱ふものにて従て發育を妨ぐる事は尋常ならず偶々婦人は已の日身を洗ふと稱し洗髪は行ひ居れど此洗髪に使用すべき材料は抑も何んぞ大抵布若くは鹽純粉を用ゆるにて之が實際に効を奏し居るか否かは疑問なり疑問にのみ止まらず素人眼に表面上は毛髪の生質にて黒くも赤くも洗浄せられし如く見ゆるも眞底より結髪の際使用せる油氣を取除け去られず夫が爲に發育を妨げ抜け毛を生ずる等の憂ひありて婦人の最も大切とすべき毛髪を遂には損するに至るなり

▲婦人の毛髪(其二) 芝櫻田本郷町なる大場理髮店主に就き毛髪の保存法を聞くに由來日本婦人と外國婦人との生活狀態に於いて相違の點あれば止むを得ざれど大體外國婦人は平素の注意深く夜は髪を解いて臥し朝は夫れをブラシにて潔むる事を努め二週間に一度位は必ず洗ふ事とし又多くは糸を以て結ばず可成ビンにて止めて毛髪の發育を助け斯くして抜毛を防ぎ居れるが第一に抜毛を防がんとするには洗髪後毛髪の先をやくべし男子にも此拂毛ありて斬髪の際の先に吹出でし血を小さき燭燵の火を以てやき毛細官の出血を止むれば抜毛の怖れなし、洗髪に材料には玉子の白味を精製せるクリームを用ひ洗髪と同時に乾かし終り之れに純粹の椿油を毛髪根元の部分丈けによくもみ込み血を充分に通すべく斯くせば發育は無論のこと抜け毛の怖れを断ち發育と共に毛髪の

つやをも増すことは實驗上争ふべからずと昨今の婦人界には盛んに此方法を實行し居れり

店頭の果實

多數の黴菌が附着して居る食べる前には水で洗へ

▲學者の調査 水菓子屋の店頭に陳列されてある果實には恐るべき多數の黴菌が附着して居ます、其黴菌の中には種々の異なる者があつて時々虎列拉や、バスターや肺病菌等が入つて居ないとは限りませぬ、西洋では近年虎列拉が流行し露國あたりが最も盛んで南方の歐羅巴に漸々傳染して行きますので西洋人は非常に恐ろしがり生で食べる水菓子の取扱に就いても最も深く注意して居ます、が近頃佛國のフイラシエー博士、サルトリ博士二人が政府の命を以て調査に従事したる結果を見ますと實に下の如くです

▲三分三厘四方に五十七萬五千菌 兩博士は第一に極く往來の劇しい通りで道幅凡そ二十三尺位の所の店頭にある葡萄を午後三時に買つて來て検査しました處其結果三分三厘四方の葡萄の表面に五十七萬五千と云ふ黴菌が付いて居るのを發見しました、第二の試験として路幅九十尺ある大通の人通り多い所の立派な大店から午後二時に買取つた葡萄には五萬八千の黴菌があり第三には大道の露店のもので、百八十萬の黴菌を見出したといふことです

▲黴菌の種類 第一の試験で見出しました中にはペニシリウム、グラウキウム、リゾプス、ニガリカンス等の他にスクワイロコク、フオゲネス、アウレウス、バクシルルス、テルモ、バクテルス、スプラチリス、ミクロコクス、カンザカンスの諸菌がありました、露店から買つた葡萄の黴菌中にはバクテルス、スプラチリス、ミクロコクス、カンザカンス、スタフィロコクス、フイオゲネス、アウレウス、ペニシリウス、グラウキウム、リゾプス等があつてこの中には病毒的の者もあつたのです

▲洗浄の効 水菓子は洗つて食べるべきものです、二博士の調査は之を證してあります、第一の試験の際に一度洗つて見ましたら

黴菌は二十一萬に減り二度洗つたものには七千しか付いて居ませんでした、第三の露店のものも一度洗つたものには五萬一千に減り二度洗ひのものには一萬一千しかありませんでした、さて普通の水で洗つたわけでは之をたやうに黴菌を殺してしまふ事が出来ませんから水菓子を食べるには洗淨して後にした方がよろしいでございます

裁縫の巧拙

學習院女學部教師 武田太郎吉氏談

總て何事に拘らず天晴れ成就せようとするには緻密なる性質と勤勉なる練習とが成功の第一根本となるのでいかに裁縫の専門學校に通つた處が或期限内に一定の方式を習つて行李に一杯の模型を取つた所が其人は裁縫が上手になつたと云ふ譯には参りませぬ、何故ならば之を練習するの暇がないからです、今日の裁縫専門學校は多く此弊があるやうです、さりとて又裁縫が一通り出来るやうになつたとして而かもその縫つたものが誠に美事の出来栄であるとしても之を仕立上げるに當つて一枚の綿入に一週間もかゝると云ふやうなことでは單に出来ないよりは勝ると云ふだけで決して一人前の専門家と云ふの出来ぬのみが他人に向つて裁縫が好く出来ますなど云ふとは許されませぬ、さてそれならば何う云ふ風に裁縫を學ぶのが一番便利であるかと云ふに、元より實物に就ての練習の大切なことは言ふまでもありませんがそれは二つ次の話として第一に大切なことは運針の熟練と云ふことです、専門學校出身の裁縫家の技術が丁稚辻込みの職人に劣ると云ふのは即ち此處に在るのです、學校では何分にも時間に制限があるので運針を練習して居る暇はありませんから、何年も年季を入れて長い間運針ばかり稽古させられた人に結局は劣けることになるのです若し此運針に充分熟して後方式を學び愈所を會得するものが出来れば我々の理想通り早くて而かも上手な名人になれると請合です、でありますから家庭に於て阿母さん達が姫御方に裁縫の御稽古の眞個

に始まる前に少し宛でも運針の御稽古なさせて置いて下されば、いざ身を入れて學ぶ時學ぶ人も樂なれば教へる教師も助かります、扱初學の人が運針のお稽古をしますには姿勢を正し兩方の脇を左右に同じに据ゑ木綿の布を二尺に切り二ツ折にして二分五厘位の縫代として左右の手は大抵五六寸間隔を置いて縫ふのです、初は曲つたりうねつたりしてなか／＼思ふやうに縫へませぬが機ます遣つて居る中には針目も揃ひ眞直に縫へるやうになります、用針は浴衣にしても厚衣着にしても縫ふにもくくるにもシツケを掛けるにも同じ針を用ひます、即ち木綿は三の五繻は四ノ四で運針の稽古にも之を用ひさせて居ります、

雜錄

○新婦人の雜誌の發刊 神田なる同文館は近來婦人雜誌が日に墮落しつゝあるを憤慨し上品にして趣味あり實益ある婦人雜誌として「婦女界」と云へるを發刊したり。

○初號は三月一日の發行にして此號には特に大附録として閑院宮妃殿下御染筆の藤花の石版刷を添へ記事も殊に精選して斬新奇麗のものもを収めたり尙ほ同誌の主催として善行慈善會なるものを設け廣く全國に亘り孝女、貞婦、並に内助の功著しき婦人の事蹟を募り當局者の審査を仰ぎて優等者十名にはシンガー裁縫機械井に蒔繪膳椀十人前を與ふるの計畫なる由

○二個の新幼稚園 東京市内に於て注目す可き二個の新幼稚園生れんとしつゝあり。一は品川八ツ山なる森村市左衛門氏の邸内に同若夫人の經營せんとするものにして目下頻りに工事中なりと云ふ設備其他固より完全なるものにして理想の幼稚園たるものなりと云ふ。今一つはお伽俱樂部の主幹なる久留島武彦氏の新設する所にしては場所ば青山、穩田、今正に建物の工事中にて出來次第來五月より開園の由なり。而して是は専らお伽俱樂部の保育研究所たる可きものなりと云ふ。



太 郎 の 豆

或處に太郎といふ子供がありました。太郎の家はお父様とお母様と太郎との三人の家庭で生活はあまり豊ではありませんでした。

お父様は朝早くから或工場へ出かけて晩燈火がついてから歸つて來ます。お母様はお父さんよりもつと早くホンの少し空がうす明るくなつた時分に起きますからお日様よりも早起きなのです。

太郎は今年八歳で學校は一年級です。夜はお父様お母様よりも早くから眠りますから朝はどうしても寢坊はして居られません。やはりお母様と一緒に起き出してお母様の御用の邪魔しない様に學校のお包をひろげて石板や本の御道具を

調べて居るのが毎朝の習慣でした。お母様は朝御飯の御仕度の間に太郎の顔洗ひや平常着をきかへるのを見て下すつてそれからお父様と太郎のお辨當をこしらへて下さるのです。お父様がお出かけなすつてから二時間計りして太郎が學校にゆく事は毎日同じ様にくり返して居ました。

太郎は學校から歸つて復習をして終ひますと太郎の好きな事してもよろしいとお母様から許されてあります。その好きな事をする間に時々お母様の御用をたしてあげるのです。

或時太郎はお母様の御用で乾物屋まで御使に行きました。乾物屋の店には白い豆赤い豆黒い豆緑色の豆丸い豆細長い豆が幾種もならべてありました。

太「おばさん今日わ。青豌豆を一升下さい。」

をばさん「はい、太郎さんよくお使が出来ますね。」

をばさんは太郎の布呂敷をひろげてごく小さい豆の半分位の穴があいて居ましたのを一寸見て緑色の丸い豆を一合柢で計つてザーツとあげました。一つ二つ

三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つ十で一升しゆうになりました。

を「太郎さん穴あながぁいて居をますから氣きをつけてお持もちなさい。」

「太おエ、をばさんさよなら」

太郎たろうは自分じぶんのかげぼうしを追おひかけながらすたく／＼生垣いけがきのそばをあるいて居をますとふるしきの穴あなから押をし出だされて豆まめの一つがと太郎たろうの横よこの軟やわい地ちの上にポツンとおちました。

太郎たろうはそんな事こと少しも心付こころつかないで家いへにもとり首尾しゆびよく御用ごようをなしとげました。澤山たくさんの中なかまから只ただ一粒つぶふるしきの外そとに出でた豆まめは高たかい處ところからおちましたのでピツクリ、すぐにもむきなほつて太郎たろうのうしろすがたを見みて居をりましたが

「ア、他たの友ともたちはどういふおうちへ行いつてどうなる事ことかしらん煮にられるのか煎いられるのか又はかはいいい幼稚園えんの子供こどもの豆細工まめざいくにつかはれるのかどうなる事ことでせう。それにしても私わたくし一人ひとりこんな處ところにのこされて幸かうか不幸ふかうかあ、どうし

たものだらう」

豆まめが深ふかく考かんがへこんで居をますとお日様ひさまがにこ／＼したお顔かほであたゝかく豆まめさんの

上を見て居らつしやいます。豆さんは見るともなく方々を見まはして上の方をむきますと丁度お日様が「よし〜心配する事はない安心してそこをお前のうちにしておいでよ」といふやうなお様子に思はれました。

「オ、うれしい私はお日様のおそばに居られるのだ。お母さんのやうにやさしいお日様のおそばなら何もこほくはないからつよくなりませう。それにあの靑空のお座敷はずいぶんひろい事。あれはお日様のお宅にちかひないよなどひとりごといつて居ますとその日はもう夕がたになつてたよりにしたお日様は西の山にかくれてもう夜の世界になりました。

するとどうした事かあちらからムク〜うすぐろい雲がわいて来ていつの間にか靑空は一面に暗くなつてポツリ〜とふりて來ました。

「ア、これは大變まあこんなにたくさんふつて來た。ア、こんなにぬれてしまつた」

そのうちに大きな音たて、ザー〜〜〜
雨は地面をはねかへるので土も一緒にとびあがります。ザー〜〜〜いふうちに

豆の體はすつかり土の下に入つてしまひました。

雨はやんで夜はあけお日様はきのふの通り青ぞらにきら／＼光つて居らつしや

いました。

豆は土の中に居てそんな事は少しも知りやうがありませんが少しポカ／＼あた／＼かくなるだけはわかつたのです。

「どうしてこんなにくらいのだらう。いつまでこんなくらい處に居るのはいやだなそれにしてもお日様はどうなすつたのだらう。それからきのふの皆もどうしたかしらん。」

豆さんはた／＼かなしくなつて泣いてばかり居ました。幾日かたちますと豆さんはあまりあた／＼かいのでヒヨイと頭をあげますといつになくすぐ頭が上つてしかもあたりが急に明るくなりました。よく見るとこのあいだの生垣の根もとでやはりお日様は青空でに／＼。太郎はお豆を買ひに行つた日から毎日相かはらず生垣のそばを通つて學校に行つたり來たりして居ります。ふと土を見ますと今芽の出たばかりの豆の二葉が。それにたつた一本。

太郎はふしぎに思ひましてかゝんで豆を見ますと豆も上をむく拍子に太郎の目と豆の芽とがバツタリ。

豆坊ちやんあなた私を知つて居らつしやいますか。」

太オやおもしろい豆の芽がものいふよ豆さんどうしたの。あなたには僕今始めてあふのですよ。あなたは僕を知つてるの。」

豆エ、知つて居ますとももう五日ばかり前あなたふろしきに豆を入れてこゝをお通りになつたでせうその折にこゝにおとされたのが私です。」

太あゝそれであなた僕を知つて居るのですね。落ちて今までどこに行つて居たんですか。」

豆イエどこにも行つては居ません。あの晩ね大雨がふりましたでせう。」

豆その晩にひどくぬれてその上土の中にうづまつてしまつたのです。それから毎日お日様のお顔を見られずくらいく土の中で泣いてばかり居ました。今朝はふしぎな事でこんな所にくびを出す事が出来ましたけれど今はもう根

も生へましたから私はこゝをおうちときめてあなたのお通りのたびにお目にかゝるのをたのしみにして居ませう」。

太郎は豆の物語をきいてやう／＼先日母さんのお使して乾物やおばさんが穴を氣をおつけなさいといつて下すつたのに考へつきました」。

その時はたゞそのまゝで豆さんとわかれましたがそのあしたの朝學校の道に又豆さんの處に來かゝりますと太郎はおどろく事に出あひました。

二葉であつた豆が一晚の中に生垣をつたつてお日様の處まで高く／＼のびて居たのであります。

そればかりでなく一ばいみのいりきつたさやがふさふさとなつて居りました。太郎はかしこい子でありましたからこのまめをかあさんにあげませうと思つて

一つとりますとこれはふしぎ手足のある豆の一寸法師がヒヨイ／＼／＼と出て來てよく見ると帽子かぶつて洋服きて劍さげてたしかに兵隊でした。

太郎は又他の一つをとりましたらさやがわれて又ヒヨイ／＼／＼兵隊がとび出しました。

今度はどうかと思ひ又一つとりますと又中から一寸法師の兵隊が出て来て見て居ると皆正しく太郎の前にならんで居ります。

太郎はおもしろくてたまりませんからお父さんのお年の數ほどとつて見ましたら二百ばかりの豆の兵隊が行列して太郎の號令をまつて居ました。

太郎は俄に大將になりましたからうれしくてたまらず。

「左向ケ左。前へすゝめ。一二一二」

と號令かけますと小さいくつの音をさせて足なみ正しく進み始めました。

太郎はその兵隊を率ゐて先お母さんに見せましたらお母さんが

「太郎やお前よい子だからつよい大將になつて下さい」と仰つて母さんもうれ

しさう。

豆の兵隊は夜になると生垣の豆のつるに歸つてもとのさやの中にねむります、

太郎がそのそばに行つて號令をかけるとすぐに出て来て見事に訓練をはじめるのでした。太郎はどんなにうれしい事でせう

めでたし／＼

會 告

來る四月廿一日(木曜日)午後一時より
東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於
て本會第十回總集會開會致し候間御繰
合せ御出席相成度候

舉行事項

- 一 開會の辭
- 二 會長の挨拶
- 三 唱歌(保姆合唱の歌)
- 四 會務報告
- 五 幹事半數改選
- 六 演說
- 七 保育上の唱歌及遊戲
- 八 餘興

右終りて茶菓、懇談、陳列品の參觀等を終りて閉
會
參考出品物は可成的多數御提出下され度郵送は本會
事務所へ直接御送附下され度候尤も返送の郵税は本
會に於て負擔可致候

明治四十三年三月

フレールベル會

夏期講習會 開設 廣告

來ル八月一日ヨリ十日間本會ニ於テ夏
期講習會ヲ開設ス目下決定セル事項左
ノ如シ

一學 料

幼兒教育ノ理論及實際

東京女子高等
師範學校助教授

和田 實

音樂

東京女子高等
師範學校教授

林 蝶

手工

東京女子高等
師範學校訓導

藤五代策

一期日

八月一日ヨリ十日迄十日ケ間毎日午
前八時ヨリ正午時迄四時間宛

右ノ外科外講演會員宿舍其他ノ事項等
ハ追テ廣告スベシ

明治四十三年三月

フレールベル會

幼児談話材料

定價金四拾錢 郵税金四錢
會員特價 金參拾錢

坊間のお伽話は多くは小學校時代の子供には適しても幼児には適さぬものです。是は本會に於て特に幼児の爲めに編纂しましたのでおばあさんやお母さんが幼児のお伽には必要のものです。本書にない話は本書を標準として作話なさることが出来ませう。

幼稚園
小學校
遊戯的

手工圖形

定價金五拾錢 郵税金四錢
會員特價 金四拾錢

是は幼稚園恩物の使用法を圖示したもので幼児をして造らしむ可きものと保姆の造りて與ふ可きものとを併せて載せてあります。

幼稚園唱歌

會員に限る 實費配布
非賣品 目下編纂中

是は本會に於て特に會員中の有志者の爲めに印刷しやうと思ふので、現在幼稚園で用ゐて居る唱歌やマーチを集め様として目下編纂中です。無論販賣は致しませんから御望みの方は今の中に御申込下さい。但し會員に限ります。

幼稚園遊戯

定價金四拾錢 郵税金四錢
會員特價 金參拾錢

幼稚園に於ける共同遊戯を説明したものです。小學校の初年級や家庭に於ても頗る有用だらうと存じます。

明治四十三年三月一日印刷
明治四十三年三月五日發行

編輯 兼東京市小石川區竹早町七十二番地
發行 和田直持

印刷者

東京市本所區番場町四番地
守岡功

女子高等師範學校内
フレーベル會